

教育実習が職業意識およびアイデンティティに及ぼす影響に関する探索的研究
—幼稚園実習直後に着目して—

高 村 和 代

The Effect of Career Consciousness and Identity on Educational Training

Kazuyo Takamura

The purpose of this study was to examine the effect of career consciousness and identity on educational training. Ninety-one junior college female students were investigated using a free descriptive questionnaire. Based on the results, the author classified 4 categories of career consciousness: 1) mastery of skill on child care, 2) understanding children, 3) understanding about the work of child care, 4) change of consciousness regarding their future. Furthermore, the relationship between these categories are investigated. In addition, the author describes a process model of career consciousness. Secondly, the author examined the self consciousness. However, the data was too small to make any valid significant analyses. This topic awaits further research.

Received Oct. 31, 2000

Key words : identity, career consciousness, educational training

問題と目的

青年は、友人関係、恋愛、進路選択、親子関係、学校生活などに関して、様々な課題に遭遇する。児童期までは、親や教師など周囲の大人たちの意見をそのまま受け容れ、自分で意思決定を行うということはほとんどしない。しかし青年期に入ると、何か課題に出くわした際に、自らどうしたらよいのかを考え、解決を試みようとするようになる。そしてその過程のなかで、「自分は何者か?」という問いへの答えを見つけようとする。このような「自分は何者か?」という問いへの取り組みは、すなわちアイデンティティの形成に向けてのプロセスであり、青年期の重要な課題とされている。また、種々の課題のなかでも特に、進路選択はアイデンティティ形成において中核をなす課題とされている(Erikson, 1968 ; Grotevant,

1987; Grotevant & Cooper, 1988; 高村, 1997a, 1997b など)。なぜなら、青年にとって自分の将来と大きく関わる進路選択は、青年期に初めて遭遇する課題であり、決して逃げることのできない問題である。そのため、真剣に進路について考え、自らの将来を自らで決めていく過程で、自己についても深く考えることになるからである。つまり、青年は進路選択という課題を探究していく中で、自らを問い直し、アイデンティティをも探究していくのである。

では、進路を探究していくプロセスにおいて、アイデンティティはどのように変容していくのであろうか。進路選択とアイデンティティとの関連についての研究は、職業発達理論の立場(足立, 1990, 1995; Harren, 1979; Raskin, 1985など)からも、アイデンティティ理論の立場(Blustein, Devenis, & Kidney, 1989; Grotevant & Cooper, 1988; Grotevant & Thorbecke, 1982; Vibdracek, Schukenberg, Skorikov, Gillespie, & Wahleheim, 1985など)からも数多く行われてきている。そのような流れの中で、高村(1997b)は、進路探求とアイデンティティ探求の相互プロセスモデルを提案している。このモデルは、進路探求のプロセスと、アイデンティティ探求が相互に影響し合い変化していく道筋を示したものである。このような相互のプロセスを明らかにしていくことは、青年を理解し、進路指導などの教育現場で青年に介入していく上で、非常に有益である。しかしこのモデルで説明されている進路探求のプロセスは、主に大学生及び短大生の一般企業への就職活動に主眼をおいて作られたものであり、教職や医師などの専門職に就こうとしている青年に関しては、あまり考慮されているものではない。

教職や医師などの専門職の場合、一般企業への就職活動とは活動方法を異にしている。例えば、一般企業への就職活動の場合、多くの学生は大学生活を始めてから希望する職種や企業を選択し始める。しかし、専門職の場合は、大学もしくは短大への進学を考える段階で、すでに将来の職業選択を行っている。そして大学生活もしくは短大生活が、その職業につくためには必要不可欠なものであり、進路探求の一部となっているのである。また、一般企業への就職活動の場合、学生は多くの選択肢の中から「自分が関心のあるもの」「自分に適しているもの」を自己と照らし合わせながら選び出す。しかし専門職の場合、すでに一つの業種に選択肢が絞られてしまっている。このような特徴の違いから、進路探求のプロセスについて検討する場合、一般企業への就職活動のプロセスの理解のみでなく、専門職に就こうとしている青年の探求プロセスについても、理解を深めていく必要がある。しかしながら、専門職に関する職業意識の変容並びにアイデンティティの変容のプロセスに関する研究は、筆者の知る限り見られない。

従って本研究では、専門職の中でも教職に就こうとしている青年を対象に、特に教育実習の時期に焦点を当て、教育実習が職業意識にどのような影響を及ぼすのかということを検討することを第一の目的とする。さらに、職業意識の変化によって、アイデンティティ変容の基となる自己意識にどのような影響を及ぼすのかを検討することを第二の目的とする。

方法

調査対象：岐阜市内短期大学幼児教育学科2年生の女子学生91名

調査時期：1998年5月（第2回目の幼稚園実習直後）

なお、1回目の実習は主に観察実習であり、実際に保育を任されるのは2回目の実習であるという理由から、2回目の実習の直後を調査時期として選定した。

調査手続き：自由記述式の質問紙を用い、授業時間内に一斉に実施、回収した。

調査内容：実習によって気づいたこと、自分自身で変化したこと、またその理由など

（Appendix 参照）

結果と考察

1. 職業意識の変化についての検討

集められた内容から、教育実習を通して職業的な意識に関する報告をしている記述を抽出し、教育心理学専攻の大学院生1名とともにKJ法を用い、以下の4つのカテゴリーに分類した。なお、作業時には、記述された内容が歪められることがないように、評定者の解釈が入らないように留意した。

C1. 仕事に関するスキルの上達

このカテゴリーは、幼稚園での授業の進め方（手遊び、紙芝居など）が上達した、もしくは、保育者としての子どもとの関わり方を身につけたなど、保育者の仕事に関するスキルの上達を報告するものである。

C2. 子どもに関する理解の深まり

子どもと実際に関わることで、現実の子どもの理解が深まったり、子どもへの関心が深まったという記述が見られるものである。

C3. 仕事内容の理解の深まり

実際に保育に携わってみて、「保育者とは何か」「保育者として何をすべきか」ということの実感を報告するものである。

C4. 将来への意識の変化

保育者として今後やっていけるのかを疑問に思ったり、保育者としてやっていくことへの自信を持ったという、将来に関する内容を報告するものである。

各カテゴリーの分布について、Table 1に示す。

Table 1 各カテゴリーの分布

	スキル	子ども	仕事内容	将来
件数	54	38	53	38
(%)	(59.3%)	(41.8%)	(58.2%)	(41.8%)

また、Table 2 に実際に記述された事例を記す。ここで記述する事例については、記述されたものをそのまま掲載した。

Table 2 各カテゴリーにおける事例

C1. 仕事に関するスキルの上達
・大きな声で話ができるようになった
・紙芝居を大きな声で読めるようになった
・人前で話すことに慣れてきた
・話し方や対応の仕方が少しずつ分かってきた
・ダメなことはダメと叱ることができるようになった
C2. 子どもに関する理解の深まり
・子どもは一生懸命で、こっちが「そんなこと…」と思うことでも真剣になる
・子どもはかわいく、みんな一緒だと思っていたが、ひとり一人ちゃんとした個性を持っていると思った
・純粋で素直な心、豊かな想像力
・同じ年齢でも月日が違うだけで遊び方も考え方も違ったり、園児同士の関わり方が違っていた
・子どもを見てると、あまりにも自分勝手な考えだし、ようわからん会話や行動をとるところが気に入った
C3. 仕事内容の理解の深まり
・自分が動いて示さないと、園児はついてきてくれない
・一緒に遊ぶだけが保育じゃない
・ひとり一人より集団で遊ぶことは難しい
・人の子どもをあずかることの重要さ、責任の重さはすごい
・子どもと接することは簡単なことではなくて、個人の発達の差などを見極めなければならず、とても体力と忍耐のいる仕事だと感じた
C4. 将来への意識の変化
・希望がふくらんだ
・少しは幼稚園で働いてもいいかなと思った
・先生になりたいなくなってしまった
・保母にあまり向かない
・本当に保育していけるのだろうか

さらに、各カテゴリーに分類される意識が生じた原因について検討し、それぞれのカテゴリーについて考察する。

C1. 仕事に関するスキルの上達

このカテゴリーに分類されるものは、以下の2つの理由が考えられる。

i) 実際に体験してみて上手いかなかったために、努力して上達した。

(cf.)

実習前は、人前で歌を歌ったり、話すのが苦手だったけど、子どもの前で、手遊びをしたり、紙芝居を読んだりしたことによって、少しはあがりやすいのが直った

たと思う。

ii) C3 「仕事内容の理解の深まり」によって、身につけるべきスキルに気づき、身につける努力をした。

(cf.)

C3 どんなときでも子どもに安心感を与えるためには、先生が落ち着いていないといけない。

C1 気持ちにゆとりを持って子どもと接することができるようになった。

C2. 子どもに関する理解の深まり

このカテゴリーに分類される記述は、ほとんどのケースにおいて、実際に子どもと接することで得られたものであり、今までの知識不足からであった。

(cf.)

子どもはみんなかわいく一緒だと思っていたが、ひとり一人ちゃんとした個性を持っている。

C3. 仕事内容の理解の深まり

このカテゴリーに分類されるものについては、以下の2点が理由として考えられる。

i) C2 「子どもに関する理解の深まり」によって、どのように保育者として子どもと接していくべきかを考えた。

(cf.)

C2 子どもたちは私たちが思っている以上に敏感で、私が気づかないことを感じていたり、それをきちんと素直に言葉、表情で表現してくる。

C3 自分も素直な気持ちで応えていかなければいけない。

ii) 保育者（実習先の職員）から得られた。

(cf.)

先生方は子どもたちにふれて接しているのがわかりました。そのことで子どもたちは心を開いてくれるとわかりました。

C4. 将来への意識の変化

このカテゴリーに分類される内容については、「自信がついた／自信をなくした」「子どもが好きになった／嫌いになった」という理由から、保育者としての仕事の選択について強化された、もしくは再考されたというものである。そのため、以下のような原因が考えられる。

i) C1 「仕事に関するスキルの上達」により自信がついた。

ii) C2 「子どもに関する理解の深まり」により子どもが好きになった／嫌いになった。

iii) C3 「仕事内容の理解の深まり」により自信がついた／自信をなくした。

しかし、このカテゴリーの原因に関しては、はっきりと言及されているものはなく、報告されている内容から推測した。また、このカテゴリーに関しては、i) ii) iii) の原因が重なって生じていることも考えられる。

以上の考察から、各カテゴリーはそれぞれが独立したものではなく、お互いが強く関連しているということが示唆される。また、これらの考察から、教育実習（幼稚園）における職業意識については、Figure 1 のようなプロセスモデルを提案する。

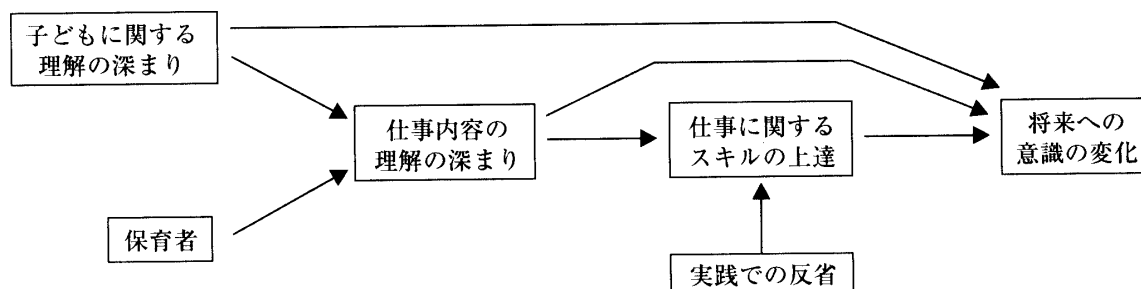


Figure 1 教育実習（幼稚園）での職業意識の変容プロセスモデル

2. 自己の気づきに関する記述が見られたケースの検討

回収された91ケースのデータから、アイデンティティ変容のきっかけとなる「自己の気づき」について記述されているものを選出した。選出の作業については、教育心理学専攻の院生1名と協議のもと行った。その結果38ケース（41.8%）について、自己の気づきについての記述が見られた。しかし、詳細な自己についての記述が見られるケースがほとんどなく、それについての検討は困難であった。したがって、選出されたケースを参考に、教育実習における職業意識の変容プロセスの特徴から、自己の変容の可能性について、若干の考察をするのみにとどめる。

C1. 仕事に関するスキルの上達

このカテゴリーの内容から、自己の気づきが生じたという内容は、ほとんど見られなかった。しかし、スキルが上達したという認知を報告者が持っているということから、達成感や自信につながったというように、肯定的な自己の気づきをしていく可能性が考えられる。

C2. 子どもに関する理解の深まり

このカテゴリーの記述から、自己の気づきを報告しているケースは3ケースであった。いずれのケースにおいても、子どもにふれることで、大人（自分自身）と比較し、生き方を考えさせられるきっかけを与えられたという内容であった。

(cf.)

C2の内容

子どもは一生懸命で、こっちが「そんなこと…」と思うことでも真剣になる。

自己の気づき

でも、自分はすぐに疲れるからとか、目の利益や人間関係、いろんなもののせいで、いろんなものから逃げて、楽しいことも、自分の手で、心で変えてしまっている。

C3. 仕事内容の理解の深まり

このカテゴリーによる記述から、自己の気づきを報告しているケースは6ケースであった。このカテゴリーでは、保育者としての役割の理解により、自分が保育者としてやっていけるのかと自信喪失に陥るケースと、保育者としての仕事のやりがいを報告するケースに分けられる。その中でも特に、自信喪失に陥るケースにおいて、自己の気づきを多く報告するようである。つまり、保育者としての役割の理解をするが、その役割について自分が力不足であることに気づくことで、否定的な自己の気づきを報告しているようである。

(cf.)

C3の内容

子どもに怒らなければいけないとき、どこかで嫌われたくないという気持ちがあって中途半端な怒り方になってしまう。先生の怒り方を見ていると子どもと向き合っってしっかり話し合いをしている。そこから信頼関係が生まれていた。

自己の気づき

いつも保守的で、本当に人とぶつかっていない面がある。

C4. 将来への意識の変化

一般企業での職業選択の場合、「自分に向いていないかも知れない」という思いは、自己についての何かしらの気づきがあったために起こるものであり、「どんな職業が向いているのか」という思いは、自己との対話によって解決されていくものである。したがって、このカテゴリーと自己の問い直しの関連性は、非常に高いと考えられている。しかし、今回のデータでは、自己についての記述は見られなかった。これはまだ将来を決定するまでに、多少の時間があったためではないかと考えられる。したがって、今後さらに将来を考えようとしていくなかで、自己についても考えていくことが予測される。

また、各カテゴリーから自己の気づきに結びついたのでないケースも散見された。例えば、保育者（実習先の職員）から受けた自分自身についての指摘、実際に実習をやり遂げることができたという達成感からなど、職業意識とは直接には関係ないが、実習という中で受けた刺激により、自己の気づきを報告しているものである。

総括

本研究では、進路選択のプロセスとアイデンティティ探求のプロセスとの関連についての研究を進める上で、進路選択のプロセスの一部として位置づけられる教育実習（幼稚園）に焦点を当て、検討を試みた。教育実習の位置づけにおいては、授業の一環であるということから、職業意識というよりも「単位を取得するために行うもの」という意識が見られるので

はないかということも予測された。しかし、本研究においてはそのような意識に基づいて実習を行っているという報告は、1 ケースもなく、全ケースにおいて、職業に関する意識の変化を報告する内容であった。したがって、教育実習（幼稚園）に関しては進路選択のプロセスの一部として扱うことができよう。

本研究の結果として、4つのカテゴリー「仕事に関するスキルの上達」「子どもに関する理解の深まり」「仕事内容の理解の深まり」「将来への意識の変化」が抽出され、各カテゴリーの因果関係から、教育実習（幼稚園）での職業意識の変容の可能性のプロセスモデルが示された。高村（1997b）は、進路選択とアイデンティティ探求の相互プロセスモデルにおいて、進路探求のプロセスとアイデンティティ探求のプロセスそれぞれのプロセスをモデルで示している。なかでも進路探求のプロセスは次のような道筋で進められると説明している（Figure 2）。まず、進路を探求していくためには、探求しようとするを「意識化」させることが必要である。この「意識化」は、大学の最終学年という状況や周囲の人々からの圧力といった環境要因から生じるものであろう。続いてどのような進路を選択すればよいのかといった「目標設定」をする。そしてある程度の選択に絞ると、次にどのように活動していくのかについて「計画」を立てる。この「計画」には、様々な情報収集が必要とされるであろう。そしてその計画を「実行」し、最終的に「決定」へとつながる。しかしこのプロセスは何らかのきっかけにより目標の変更を余儀なくされたり、計画の立て直しを迫られ、プロセスが戻ることもある。

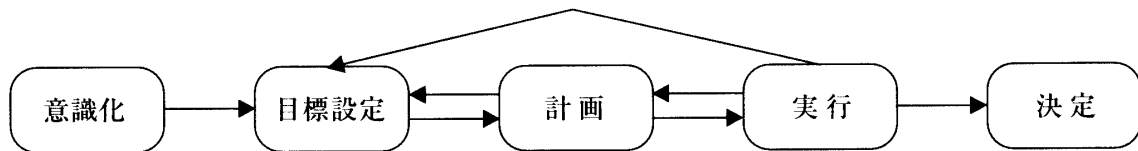


Figure 2 進路探究のプロセスモデル（高村1997bより）

本研究の結果をこの進路探求のプロセスモデルに当てはめると、教育実習は、実際に目標とする職業に就くために必要な活動であり、職業意識を強化させ、さらに職業的なスキルを向上させるということから、「実行」に位置づけることができよう。また、「将来への意識の変化」によって、自分の選択した職業が合わないと考えた場合、進路探求プロセスモデルにおける「目標設定」へと戻る可能性もあるであろう。教職と一般企業への就職活動では、「意識化」から「計画」に至るまでのプロセスは、時期の違いこそあれ、方法には違いはない。しかし、「実行」の段階で、一般企業を選択する場合と専門職や公務員を選択する場合は、それぞれの方法で違いが見られるようになる。そのため、進路選択について研究を進めていくためには、選択された進路による方法を詳細に理解しておく必要がある。本研究では、教育

実習に焦点を当てたことで、その時期での職業意識の変化を明らかにできた。これは、教育実習の理解、さらには進路選択についての研究において、一つの視点を示したことは明らかであろう。しかし、今回は教育実習でも特に幼稚園のみに焦点を当てたものである。それゆえ、4つのカテゴリーが教育実習全てにおいて一般化できるかどうかについては、さらなる検討が必要である。また、教育実習以外の実習（看護や医学など）についても、検討をしていかなければならない。

また、本研究では自己に関する内容を、詳細に採集することができなかった。しかし、41.8%のケースにおいては、何らかの自己に関する報告が見られた。この報告は、今後アイデンティティ探求を進めていく可能性があることを示唆している。今回は、短期間にできるだけ多くのデータを収集するために、自由記述式の質問紙を用いて調査を行ってしまった。記述式では、自己についての内容を詳細に記述することは、被験者にとって非常に困難であり、実際に自己の気づきが生じていても表現されていないことがある。本来このような研究をする場合、詳細に被験者から内容を聞き出すことのできる、半構造化された面接法が適しているであろう。さらに、本研究の位置づけのように、進路選択プロセスおよびアイデンティティ探求プロセスについて検討するためには、実習の前、実習後、さらには実際に職業に就くまでの期間に、縦断的に面接を行うことが望ましいであろう。

近年の就職状況は、「超氷河期」といわれ、青年にとって非常に厳しいものである。そのような中で就職活動を強いられ、度重なる不採用や不合格などで、青年は自分自身を見失い、苦悩することもあるであろう。また逆に、自己について見つめ直さず、流されるように将来を決定していく青年も少なくない。自己を熟考せず進路を決定していくということは、自分自身で納得して職業を選択したということにはならない。したがって、このようにして進路を決定した場合、その後その選択において苦境に立たされた場合に、決定について受容していくことが困難になることが予想される。それゆえ、どのようにして青年は自己を見つめ、アイデンティティを形成していくのか、また自己を見つめ直さない場合、どのようなことが原因とされるのかについて検討していくことは、非常に重要である。さらに、それらのことを明らかにしていくことで、どのように青年に対して教育的な介入を図ればよいかを考えていくことが、今後の課題である。

引用文献

- 足立明久 1990 “自己概念の職業的用語への翻訳”の過程に関する認知的構造 進路指導研究, 11, 1-9.
- 足立明久 1995 職業的自己実現と職業的同一性の各概念の具体化—進路の指導と相談の実践的方法論のために— 進路指導研究, 19, 1-9.
- Erikson, E. H. 1968 *Identity : Youth and crisis*. New York : Norton. (岩瀬康理訳 1973 アイデンティティ 金沢文庫)
- Grotevant, H. D. 1987 Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222.
- Grotevant, H. D. & Cooper, C. R. 1988 The role of family experience in career exploration : A life-span perspective. In *Life-span development and behavior* Vol. 8, Baltes, P. B., Lerner, R. M. & Featherman, D. (Eds). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum, pp. 231-258.
- Harren, V. A. 1979 A model of career decision-making for college students. *Journal of Vocational Behavior*, 14, 119-133.
- Raskin, P. M. 1985 Identity and vocational development. In *Identity in adolescence : Process and contents* Waterman, A. S. (Eds). 25-42.
- 高村和代 1997a 課題探求時におけるアイデンティティ変容について 教育心理学研究, 45, 243-253.
- 高村和代 1997b 進路探求とアイデンティティ探求の相互関連プロセスについて—新しいアイデンティティプロセスモデルの提案— 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 44, 177-189.
- Vondracek, F. W., Schukenberg, J., Skorikov, V., Gillespie, L. K., and Wahleheim, C. 1985 The relationship of identity status to career indecision during adolescence. *Journal of Adolescence*, 18, 17-29.

Appendix 質問項目

幼稚園実習を振り返って下さい。実習が自分自身に何らかの影響を与えていると思います。以下の点について、どのようなことでもかまいませんので、自由に思いつくだけ、できるだけたくさん書いて下さい。

- A. 自分自身が変わったと思うところ。またなぜ変わったのか、その理由。
 - B. 自分自身について気付いたこと。またなぜそれに気付いたのか、その理由。
 - C. 自分について考えさせられたこと。またなぜ考えさせられたのか、その理由。
 - D. 自分自身にとってプラスになったこと。
 - E. 自分自身にとってマイナスになったこと。
 - F. その他、実習を行って感じたこと、思ったこと。
-